

氏名	吉田 文久
学位の種類	博士（人類学）
学位記番号	人博甲第 19 号
学位授与の日付	令和 2 年 3 月 20 日
論文題名	英国における民俗フットボールの人類学的研究 ～その変容の社会的背景と存続の現代的意義～
審査委員	主査（教授）後藤 明 （教授）坂井 信三 （教授）大塚 達朗 （教授）石原 美奈子 （教授）和崎 春日 （中部大学）

1. 論文の内容の要旨

本研究の目的は、英国の民俗フットボールについて、長年のフィールドワークの成果に基づいてその実態と特徴を整理し、それが変容しつつ存続してきた社会的背景と現代的意義を明らかにした上で、日本の社会に向けた教育還元の可能性について論じることにある。

序論における問題の設定につづいて、第1章では、かつて英国各地で行われていた民俗フットボールが、産業革命を経る中であるものは消滅し、あるものは存続してきた姿を描き出す。ついで第2章では、歴史資料と現存するすべてのゲームの現地調査をもとに、変容の諸様相とその社会的背景を整理する。以上から、従来スポーツ史研究において近代スポーツの前史的形態としてとらえられてきた民俗フットボールが、産業革命期の前後をとおして近代スポーツと並立・並存しつつ変容してきたという新たな視点を提示する。

以上のような民俗フットボールの包括的な理解の上に立って、第3章ではスコットランド、Kirkwall で今日も行われているゲームを事例として取り上げ、これまで具体的に記述分析されたことのない民俗フットボールを民族誌的に記述し、その変容と存続の実態を明らかにする。そこでは過去約170年の歴史の中で、民俗フットボールが住民たちの主体的な関りをとおして変容・成長し、今日では地域住民の一体感を醸成し、コミュニティを統合する契機として重要な社会的機能を果たすようになってきていることを示す。

以上の考察から、第4章では、従来民俗ゲームの特徴として否定的に価値づけられてきた暴力性が、現存する民俗フットボールにおいてはプレーヤーの自己規律によってゲームを成立させ、楽しみを保障する大切な要素となっていることを確認する。候補者はそこにルールの強化と脱法的暴力という現代スポーツの自己矛盾状態を批判的に検討する手掛かりを見出し、さらにわが国の生涯教育および学校スポーツ教育への教育還元の可能性を論じる。

2. 論文審査の結果の要旨

最初に、本研究は候補者が長年にわたって英国各地で続けてきたフィールドワークの集大成であることを評価すべきであろう。候補者がこの研究を始めるまで、民俗フットボールが英国の17か所で今日も行われていることは、現地の研究者にも知られていなかった。したがって英国に現存する民俗フットボールの実態を確認したことは、候補者の第一の功績といえよう。

ついで本論文の内容を検討するなら、大きく二つの点で評価することができる。一つはスポーツ史上における民俗フットボールの位置づけに関する新たな解釈の提示であり、いま一つはこれまで具体的に成されてこなかった民俗フットボールの民族誌的な記述である。

従来のスポーツ史では、民俗フットボールは近代スポーツとしてのサッカー・ラグビーの前身であり、産業革命にともなう近代スポーツの成立と入れ替わりに衰退した、中世的な民衆娯楽の一つとみなされてきた。通説によれば、両者の交替はルールのない無統制で暴力的な民俗フットボールが、ピューリタニズムや啓蒙主義に代表される近代の価値観の影響下で、成文化されたルールによって規制され、審判によって管理される合理的なゲー

ムに取って代わられていく過程として説明されてきた。

それに対して本研究は、先行研究が提示する歴史資料の再分析と現存するすべてのゲームの現地調査に立脚して、新しい見方を提示している。それは、第一に産業革命の最盛期でありかつ近代スポーツの成立期でもある 19 世紀半ばが、民俗フットボールにとっても盛んにプレーされた隆盛期であったと思われること、第二に多くの民俗フットボールを消滅に導いた要因として、従来から言われてきた近代的価値観の導入だけでなく産業革命にもなう人口移動も重要な意味をもったと思われることである。すなわち都市部では人口流入によってゲームが大規模化し粗暴化した結果、公共の安全を理由に公権力によって中止に追い込まれ、反対に農村部ではプレー人口の減少がゲームの消滅を招いたという解釈である。文化史的な観点による従来の通説に対して、この解釈は社会経済史的な観点から見直しを迫るものである。本研究ではこの過程については実証的な裏付けが十分なされているとはいえ、解釈は仮説にとどまっており、この点は今後の研究に期待したい。しかし、民俗フットボールはたんに近代スポーツの前史的存在ではなく、産業革命前後を通じて変容しつつ存続していたのであり、その一部が新たな社会的条件に適応して今日のゲームに至ったものであることを、事例を通して示したことはスポーツ史研究への学術的な貢献として評価できよう。

つづく第 3 章で取り上げられるスコットランド、Kirkwall のゲームに関する事例は、スポーツの人類学的研究に対する本研究の大きな貢献として評価することができる。Kirkwall のゲームは、今日ではインターネットをとおしてグローバルに知られたゲームとなっているが、これまで学術的な研究はなされていなかった。本研究はこのゲームについて、過去から現在までの変容の諸様相とその要因、ルールがなく一定の暴力も容認されるプレーの実態、ゲームを支える地域住民の組織とその活動など、地域社会に根づいた民俗フットボールの姿を生き生きと描き出し、これまでにない民族誌的記述を提供するものとなっている。これはたんにスポーツ研究への貢献を越えて、変化する社会状況に適応して伝統行事を現代的に再創造していく地域住民の主体的活動を明らかにする事例研究として、人類学研究にも一定の貢献をなすものといえる。

それに対して候補者が本研究のもう一つの目的とする現代日本の社会に向けた教育還元はいくつかの初歩的な提言にとどまっており、今後の研鑽に待たれるところである。とはいえ、スポーツにおける暴力に関して表立って論じるのを避ける風潮のある現代日本社会に対して、民俗フットボールの事例研究をとおして、内在的な自己規律によって制御された暴力がゲームを成立させる構成的な力をもつだけでなく、プレーヤーの社会的な人格形成に対しても肯定的な力もちうることを示したことは、スポーツ教育に対する示唆に富む貢献として高く評価できよう。

令和 2 年 2 月 21 日

主査 (教授) 後藤 明
(教授) 坂井 信三
(教授) 大塚 達朗
(教授) 石原 美奈子
(教授) 和崎 春日 (中部大学)